春日偶成（しゅんじつぐうせい）（夏目漱石（なつめそうせき））

道（ゆ）う　莫（な）かれ　風塵（ふうじん）に　老（お）ゆと
軒（けん）に　当（あた）れば　野趣（やしゅ）　新（あら）たなり
竹（たけ）　深（ふこ）うして　鶯（うぐいす）　乱（みだ）れ　囀（さえず）り
清昼（せいちゅう）　臥（が）して　春（はる）を　聴（き）く

莫道風塵老　當軒野趣新
竹深鶯亂囀　清書臥聽春

解説　家の庭の晩春の光景に対して閑寂な心境を述べたもの。

語釈　※道＝云と同義。※風塵＝人の世。俗世間。※当軒＝丁度てすりの処に出て眺めると。※乱囀＝あちこちに飛びながらさえずる。※野趣…素朴で健康な自然のおもむき。※清昼＝俗世間から超越したしずかなま昼。※聰春＝春の情趣を聞く。

通釈　俗世間の煩雑さの中でいたずらに老いてゆくことが嘆かれる等といってはいけない。君よ、胸中の閑日月を抱いて過ごしたまえ。まあ、我が家の縁側からの、この春の風情はどうであろう。健康で素朴な自然の新鮮さが一杯に溢れているではないか。さて、竹も勢いよく伸び、深々と茂っており、又、鶯があちこち鳴くのが聞こえてくる。どれ、ゴロリと横になって、この勿体ないほど淑（しと）やかで優雅な真昼間。しみじみと鶯の声を聞きながら春の情趣を味わおう。